

防災千葉北部

NPO法人日本防災士会 千葉県北部支部会報 平成27年1月1日発行(第19号)
事務局 〒273-0011 船橋市湊町2-8-11-411 090-5500-0845(伴登方)

新年挨拶

支部長 山村 貴司

新年明けましておめでとうございます。

昨年は関東地方では2月に歴史的な大雪に見舞われ、千葉県においても甚大な被害がありました。8月には広島市において豪雨に伴う土砂災害があり、74の方が犠牲になりました。また9月長野県・岐阜県の県境に位置する御嶽山が噴火して、死者57人行方不明者6名の甚大

な火山災害もありました。そして東日本大震災から間もなく4年が経過しようとしていますが、依然として復興は遅れています。



私達が住む日本は四季があり自から様々な恩恵を受けておりますが、そのぶん多くの災害に見舞われる可能性が諸外国に比べても高い国であります。災害は日本に住んでいる限り決して対岸の火事ではありません。私達防災士は、現在日本全体で約8万人がおりそれぞれの地域、職場において防災・減災活動に精進しております。

そのような中で私達日本防災士会千葉県北部支部は、皆様のおかげを持ちまして設立から6年目を迎えます。会員数も60名となりました。本年は支部長を始めとする役員も大幅に刷新をしていく予定でもあります。

今後も私達、日本防災士会千葉県北部支部は会員、地域住民の方々との絆を更に構築していくために、より地域に根ざした防災訓練や地域公民館などでの講演会や勉強会を開催していく予定ですので、皆様方のご参加ご協力を心からお願い申し上げます。



船橋市中学生防災学習支援

海神中・芝山中の2校で実施

今年度の船橋市中学生防災学習は、例年より1校少なく海神中学校と芝山中学校の2校で、例年通り中学1年生(海神中は223人、芝山中は83人)を対象に実施されました。

いずれも昨年に続き2年目の実施で、各中学校での実施日程は下表のとおりです。私達

の支部等(他にSL船橋ネットワークも参加)の役割は、これら地図作成や現地調査等(応急救護訓練を除く)における助言や現地での安全確保等です。なお実施訓練は、各地域の地元自治会からも参加して行われました。

H25年度 中学生防災学習実施日程

学習項目	海神中学校	芝山中学校
導入説明(1時限)	11月6日(木)	11月17日(月)
図上訓練DIG作図(2時限)	11月11日(火)	11月26日(水)
応急救護訓練(2時限)	11月21日(金)	12月10日(水)
実施訓練(2時限)	12月8日(月)	12月17日(水)
生徒数/班数	223人/26班	83人/7班
支部からの延支援者数	16名	12名

導入説明は、この防災学習の目的や授業内容の説明です。東日本大震災や阪神淡路大震災の映像等を見ながらの説明で、生徒は自分が住んでいる地域の危険箇所等を調べておくよう指示されました。



導入説明の様子

図上訓練DIGは、住所が近い生徒が1班(10数人以下で構成)となって行われました。市作成のハザードマップや事前に調査した自身達が住んでいる地域や通学路での危険

箇所を地図に書き込み、オリジナルな防災マップを作成するもので、自分が住んでいる地域の防災実態を知ることが目的としています。また、これを踏まえて通常の通学路とは別の安全な通学路を検討し、図示しました。

応急救護訓練は、心肺蘇生法、けが人の体位管理法、応急担架の作成・搬送、三角巾による応急手当法を訓練するもので、市消防署担当者が指導にあたりました。



DIG作図

実施訓練はまず現地踏査で、作成した防災マップを持って各班別に学校から自分達の地域まで、現地の危険性を確認しながら通常通学ルート等を踏査しました。次に帰校後新たに気付いたことなどを地図に記入し、災害発生時にどのようにして身を守るか等について各班で話されました。なお芝山中学校では各班から発表(3分/班)がありました。

最後に安藤危機監理官から「防災学習のまとめ」があり、東日本大震災での船橋市での被害や釜石の奇跡と言われる事例の紹介があり、災害に対する日頃の備えや訓練の大切

さが強調されました。



現地踏査出発前のミーティング

公益財団法人千葉市国際交流協会 ちば多文化協プロジェクト(文化庁委託事業) テーマでつながる日本語クラス「防災」に参加支援

千葉市国際交流協会主催の「防災」をテーマとする表記のクラスが、千葉市在住の外国人を対象に10月31日と11月7日、花見川保健福祉センターで開催され、同協会の依頼に基づき当支部から3名(小村支部長、中村(誠)副支部長、伴登事務局長)が支援参加しました。



消火器による消火訓練

初回(10月31日)は千葉市防災普及公社の起震車による東日本大震災震動の体験、消火器による消火訓練が行われ、さらに協会の担当者による防災講話がありました。「外国人のための防災ハンドブック」2014・3千葉市国際交流課発行を使用) 私達防災士は消火訓練の指導や講話後の話合いに対応しました。

第2回目(11月7日)は参加した外国人の日本語によるスピーチから始まりました。



スピーチする参加外国人

東日本大震災を経験した参加者もあり、水・食料・情報等の入手に苦勞したこと、地震は急に起こるので怖いこと、ガーナやベトナムでは地震はなく日本に来て初めて経験したこと、中国では黄砂が酷く日常生活に大変影響していること等が話されました。

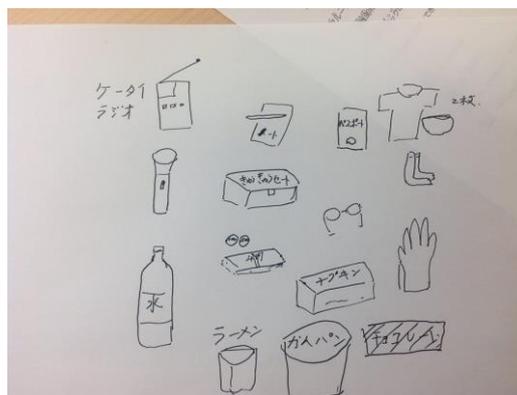
スピーチの後は5グループに分かれての作業で、自分が住んでいる地区の避難所はどこかを地図で確認し、① 防災バッグに何をいれておくか、② 自助又は共助として(グループによってどちらかを選んで) 何ができ、何

をすべきか等について話合われ、マインドマップ風にまとめました。私達防災士はこれの手助けをしました。①、②の成果の例は写真のとおりです。



話し合い・検討風景

在日外国人相手の防減災支援活動は、当支部にとって初めての経験ですが、今後どのように取組んでいくか検討したいと思います。



① 防災バッグに入れておく物(例)



② 防災マインドマップ(例)

地域防減災支援活動(習志野市)

吹上苑町会防災

吹上苑町会防災訓練への支援活動はH22年から毎年実施してきましたが、訓練は今年も12

月6日(土)の午前9時から、地元わかば公園で下記のスケジュールで実施されました。

訓練項目		担当者	実施内容
テント設営等準備	8:30~9:00	自主防災会、おたすけ隊	テント3基、炊き出し準備
広報活動	8:15~9:00	同上	町内全域
1. 初期消火	9:20~9:40	消防署員	消火器による消火訓練
2. 心肺蘇生法	9:40~10:00	消防署員	心臓マッサージ、AED訓練
3. 発電機起動/関連機器操作	10:00~10:30	町会経験者	発電機、チェンソー、排水ポンプ 起動操作
4. ブルシートによる三角テント張り	10:30~11:00	防災士会(中村、青木、伴登)	汎用ブルシートを用いた三角テント張り及び関連ロープワーク訓練
5. 災害用伝言ダイヤル171	11:00~11:30	NTT担当者	
講評	11:30~	自主防災会副会長、佐々木消防団長、中村副支部長	

当日は天候にも恵まれ、町会員約50名が参加して、前表のスケジュールにより全員参加で訓練が行なわれました。当支部からは中村(誠)副支部長ら3名が参加しブルーシートによる三角テントの設置(それに必要なロープワーク訓練を含む。)について指導しました。

各訓練項目は例年と大差はありませんが、この地区には数箇所の土砂災害特別警戒区域があり、10月6日の台風18号では時間雨量40.5mmの激しい雨を記録し、避難所も開設ことから、参加者の関心・意欲は殊のほか高く、熱心な訓練模様でした。



三角テントを張り、ロープワーク訓練



発動機起動及び関連機器操作訓練



講評する中村副支部長

災害福祉について(ソーシャルワーク)

社会福祉士/防災士 小村 貴司

災害福祉という言葉がようやく少しずつ広がってきました。私は東日本大震災の以前から、福祉の現場において、福祉は防災と密接な関係にあると機会がある度に主張してきましたが、東日本大震災以前はほぼ理解ゼロでした。専門職の団体である社会福祉士会でもあまり取り上げられていませんでした。そのような中で東日本大震災が発生したのです。震災後に私が提唱しておりました災害福祉部会が千葉県社

会福祉士会でも誕生したのですが、まだまだ遅れている分野と言えます。

私達、社会福祉士はソーシャルワーカーと言われていきます。職場は多岐にわたります。児童から高齢者までの社会福祉サービスを必要とする人の相談に応じ、その方にあった助言や援助を行う仕事です。

日常的な相談業務(ソーシャルワーク)とは何か?生活困難、困窮、生きづらさと大きく係

わり、人々とその環境の間の多様で複雑な相互作用に働きかけて、その人がもつ可能性を十分に発展させ、その生活を豊かなものにして、かつ機能不全になることを防ぐことです。社会福祉士としてのソーシャルワークが焦点を置くのは問題解決と変革であり、その人の生活に変革をもたらす仲介者です。

それでは災害時におけるソーシャルワークとは何か？災害は突然に起こり、尊い人の命を奪い、多くの人々が家族や地域を失います。東日本大震災では、生産手段や消費手段、交通手段も一瞬にして失われました。被災者の中でも生活の基盤が弱かった人々や高齢者、心身のあらゆる状況により暮らしにくさを抱えていた人々にとって、生活の困難は大きく膨れ上がり、身動きが取れない状況に追い込まれ、最悪の場合は死に至ることもあります。平常時において社会福祉士は地域のあらゆる社会資源を駆使するのが基本となりますが、災害時においてはこれらの社会資源自体が機能不全を起こしていることが多いのも実態です。しかしながら社会正義の実現を目標としている社会福祉士にとって、災害時こそ本質が発揮される時です。東日本大震災では、心のケアから家族療法、施設や機関の管理運営、地域の再組織化、政策反映への働きかけ、社会資源開発まで見えております。

社会福祉士にとっての復興支援とは何か？「災害によって様々な障害を受けた人々の人生の主導権を被災者に再獲得してもらうための支援」であると思います。その支援の為に専門職として何をしなければならないのか？何ができるのか？要約すると次のようになります。

- 1) 社会福祉士は、被災者の幾重にも重なった痛み・障害（生活困難・家族・友人の死・住居の崩壊等による怒り・悲しみ・不安・後悔）を理解し寄り添う。
- 2) 継続的な支援を、包括的に体系化して行う。

3) 想像力と創造性を持ち、社会資源を開発・開拓して、関係機関や住民との交渉と調整を速やかに行う。

4) 被災者が中心であることを基本的に認識し、住民・行政に共有されるように福祉教育やボランティア活動を再調整する。



以上のことを実現していくためには下記の方法が重要と言えます。

1) **アウトリーチ** もともとの意味は手をさしのべるという意味です。災害時においては被災地で刻一刻と状況が変化しますので、相談が来るのを待つのではなく被災地に直接向かい、地域住民の方々と信頼関係を構築して問題を探ります。

2) **ニーズキャッチ** これは災害時だけではなく平時におけるソーシャルワーク活動に言えます。しかしながら災害時においては個人の問題だけではなく、地域全体が直面している大きな問題が見えてきます。また大きな違いは地域の生活形態が短期に変化して、その度に問題が発生するリスクが高いことです。ニーズキャッチは専門職のみではなく、様々な視点から捉えることが重要です。

3) **アセスメント** 困難に直面し支援が必要である人たちの様々な情報を集約して、その人の困難や課題を明確化して援助計画を立てていくことであり、ここで重要なことは身体的・環境面からの客観的な視点と共にその人がどの

ように感じているのか？主観的な視点も必要です。平時とは異なり災害時は生活の課題が刻一刻と変化していきます。被災者の主観(精神面)の変化を捉えることが重要です。

4) チームケア 病院や施設においてもチームケアの重要性は日頃から言われておりますが、災害時には医療・福祉の専門職だけのチームケアではなく法律職、建築職や専門職ではない地域住民・ボランティアの方々とも連携を取り合うことが重要であり多職種チームと言えます。

5) コーディネート 日頃のソーシャルワーク活動におけるコーディネートはケアマネジメントの要素とネットワークの要素があります。大規模な災害が発生すると被災者は健康問題、住まい、経済的な問題と多岐にわたり同時発生的に起こることも多くあります。社会福祉士は福祉専門職以外の専門職と被災者の方々の橋渡しとなる必要が求められます。

6) エンパワメント エンパワメントとは、顕在するものも潜在するものも含めて、自分が持っている力に本人が気づき、自身の力を獲得し、発揮しながら自立していくことです。被災者は力も気力もないから、専門職やボランティアが中心となり復興を行うという考え方は地域の人々のストレスや抑圧の原因となり、危険といえます。

以上が被災地におけるソーシャルワークの基本となる事柄です。あくまでも重要なことは課題解決の主役は生活者である当事者であると意識して専門職としてアプローチをすることです。



今後の災害福祉の展望としてはDMAT (Disaster Medical Assistance Team 災害派遣医療チーム) の福祉版であるDCAT (Disaster Care Assistance Team 災害派遣福祉チーム) の構築が訴えられていますが、まだまだ日本における災害福祉のアプローチの為の理論や技術は生まれたばかりであり不完全と言えます。今後災害大国かつ超高齢社会の日本において学術的にも重要な研究分野になると思われま



(注記) 記載内容と写真とは直接関係は無く、編集者(伴登)が任意に添付したものです。

事務局から

1. 12月19日、「全国地震動予測地図」2014年版が公表されました。

右図は「今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率」の2014版と2013版(従来モデル)の確率の差(2014版-2013版)を示したもので、特に関東地方の確率が上昇しています。(赤色系は上昇、青色系は低下) これは、

①相模トラフ沿いのM8クラスの地震について、従来考慮していなかった元禄型関東地震以外のものも考慮したこと

②東北地方太平洋沖地震の実績に鑑みて、海溝型地震のうち震源断層を特定しにくい地震の想定最大マグニチュードを大きくしたこと(従来は最大M8.2としていた。)

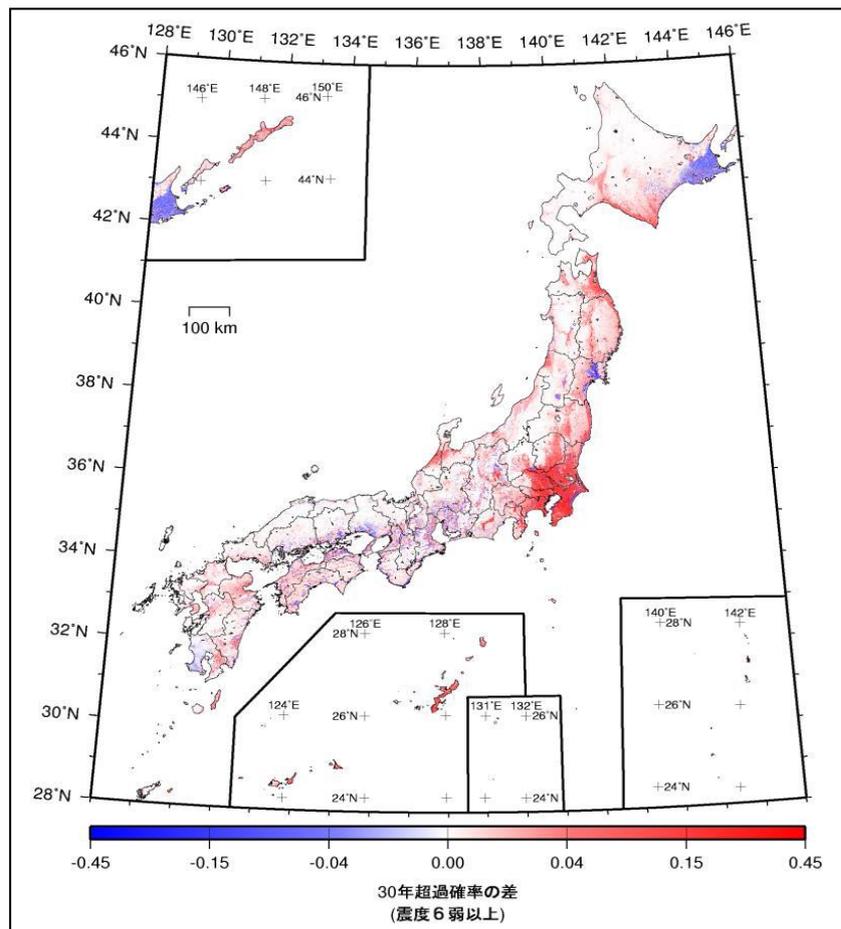
③フィリピン海プレートのモデルの深さが浅くなったこと

等により確率が上昇したと説明されています。

(なお、2013版の暫定改良モデルによる推計結果と2014版とは大差はありません。)

震度は250mメッシュで推算

されており、自宅付近等任意の地点での確率は下記HPで確認出来ますが、確率の高低は安全性の高低ではなく、これに一喜一憂することなく、建物の耐震対策や家具転倒防止等の安全対策を施すことが肝要です。 <http://www.j-shis.bosai.go.jp/map/>



2. 支部は会員のスキルアップ、地域防減災支援、各自の防災士としての思いの実現等を目指して活動したいと考えていますが、ややもすると方向がずれることがあると思います。是非皆様の忌憚のないご意見をお寄せ頂きたいと願っています。昨年は女性防災士が5名入会し合計7名となりました。より多様なご意見を踏まえて、幅広い活動が出来るようになったと思います。皆様の一層のご協力をよろしくお願いいたします。

皆様に幸多い年でありますように祈念し、

合わせて支部へのご支援ご協力をお願いいたします